4 月 3 日のメッセージ

聖書：マルコによる福音書　10：　32 – 45

「三日の後に復活する」

「異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」(マルコによる福音書 10:34)

イエスが受難の予告をされるのは、今回で三度目です。同じことを三度繰り返すのは、「大切だから」という可能性と、「何度言ってもわからないから」という可能性の 2 通りあります。この場面はどちらでしょう。

これまでイエスは手を替え品を替え、弟子たちの不安を取り除こうとしてこられました。もう十分に伝えてこられました。この点から考えれば、すでにわかっていることではあるけれど、「大切だから」もう一度言っておこうと思われた、と言えそうです。

しかし、前後の箇所を見てみると疑問が残ります。たとえば、イエスが「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」(マルコによる福音書 10:25)と言われると、「それでは、だれが救われるのだろうか」(マルコによる福音書 10:26)と動揺します。救いの確信があるならば、出てこない言葉です。また、弟子たちを代表する二人、ヤコブとヨハネは、「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」(マルコによる福音書 10:37)と、自分勝手な願いを持ち出します。救いの本質がわかっているならば、出てこない言葉でしょう。

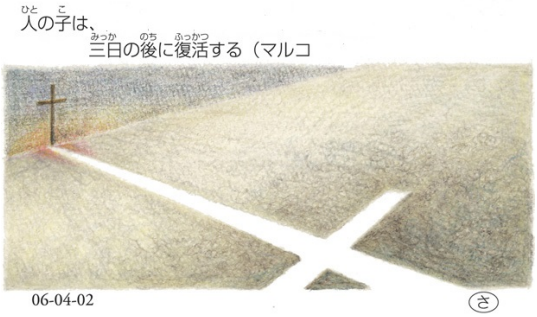
その点から見れば、やはり「わかっていないから」もう一度伝えられたと考える方がしっくりきます。

自分たちの願い通りのイエスであってほしいとの思いが透けて見えます。だから、受難を予告されたイエスが先頭に立って進まれるだけで不安が増大するのです。自分の願いが叶わなくなることを恐れています。

何度も言っていますが、救いは自分の欲望が実現することではありません。イエスも繰り返しそのことを教えてこられました。それでも理解できない弟子たちの、そして私たちの姿がここにあります。

「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」(マルコによる福音書 10:45)

それは、「地の果てまで／すべての人が主を認め、御もとに立ち帰り／国々の民が御前にひれ伏」(詩編 22:28)すためでした。だから、イエスはどのような苦難が待っていようとも、神の思いに応えようとされるのです。その姿を、後にパウロは「わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。」(ローマの信徒への手紙 5:3-4)と言い表しました。

確かに十字架は、地上では敗北を表します。犯罪人として裁かれ、そこには何の救いもないように思われます。しかし、「主は、決して／あなたをいつまでも捨て置かれはしない。」(哀歌 3:31)との希望がイエスを支えています。「人の子らを苦しめ悩ますことがあっても／それが御心なのではない。」(哀歌 3:33)ことを知っておられるのです。

だから、共に歩み、共にこの苦難を耐えてほしい。そう願われています。「人の子は三日の後に復活する。」(マルコによる福音書 10:34)のだから、安心して希望を持ち続けてほしい、と。イエスは今日も、そう呼びかけておられます。何度も伝えてきたことに早く気づいてほしい、と首を長くして待っておられるのです。